

啄木日記

小田切秀雄編

REGULUS LIBRARY



生活を痛切に吐露する日記の精粹

<編者紹介>

小田切秀雄（おだぎり・ひでお）

1916年 東京に生まれる。

1941年 法政大学文学部国文科卒業。

現 在 文芸評論家，法政大学文学部教授。

著 書 『万葉の伝統』『文学的立場と政治的
立場』『現代的状況に抗する文学』
『文学概論』『現代文学史』（全二巻）
『明治・大正の作家たち』Ⅰ・Ⅱ『昭和
の作家たち』Ⅰ・Ⅱ『小田切秀雄
著作集』（全七巻）その他。

写真提供 岩城之徳氏

啄木日記

レゲルス文庫 131

1981年4月5日 初版第1刷発行

著 者 石川啄木

編 者 小田切秀雄

発行者 栗生一郎

装幀者 栃折久美子

発行所 株式会社 第三文明社

東京都千代田区猿楽町 2-5-4

郵便番号 101 電話 03(294) 8731 (代)

振替口座 東京 5-117823

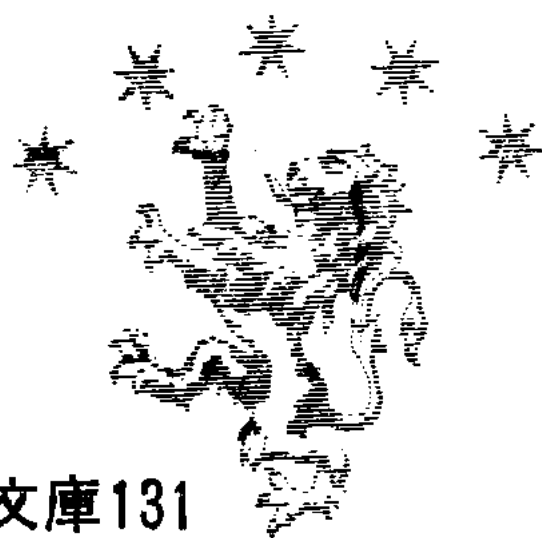
印刷所 明和印刷株式会社

（落丁本・乱丁本はおとりかえします）

0295—1131—4438

啄木日記

小田切秀雄編



第三文明社 レグルス文庫131

この本のこと

編 者

この一冊は、石川啄木の日記（全体ではこれの四倍近くもある）のうちから、最もおもしろいところ、最も読みごたえのあるところを、その前後のところともどもたっぷり抜きだして、年代の順にならべたものである。啄木の日記としては、明治四二（一九〇九）年の『ローマ字日記』がとくに有名になっており、実際にきわめてすぐれたものなので、もちろん本書にはその全文を、日本字にして収めておいたが、それだけがすぐれているというのではないことは、同じく本書に収めてある『明治四十四年当用日記』ひとつによっても知られる通りである。

啄木日記には、かれの生活と体験と感情と思考とのいっさいが、洗いざらい赤裸々に、また驚くべき明晰と微妙さで、存分に書きこまれている。これを読んでゆくと、一人の人間・夢想家・生活者・退廃者・詩人・作家・批評家・思想家等としての啄木の姿が、濃厚なイメージで浮び上ってくる。永井荷風の『断腸亭日乗』とはまたちがって、啄木の場合には、多くの矛盾にさらされ、しかもその追求を回避せずに苦しんでいる自分自身の、あるがままの生活と内面性とを、こまかく、せつせと書き続けているのであるが、それがどんなすぐれた小説にも劣らぬ深い魅力を示すにいたっている——そういう異例の日記がここにある。

目次

この本のこと

渋民日記……………5

明治四十丁未歳日誌……………51

明治四十一年日誌……………93

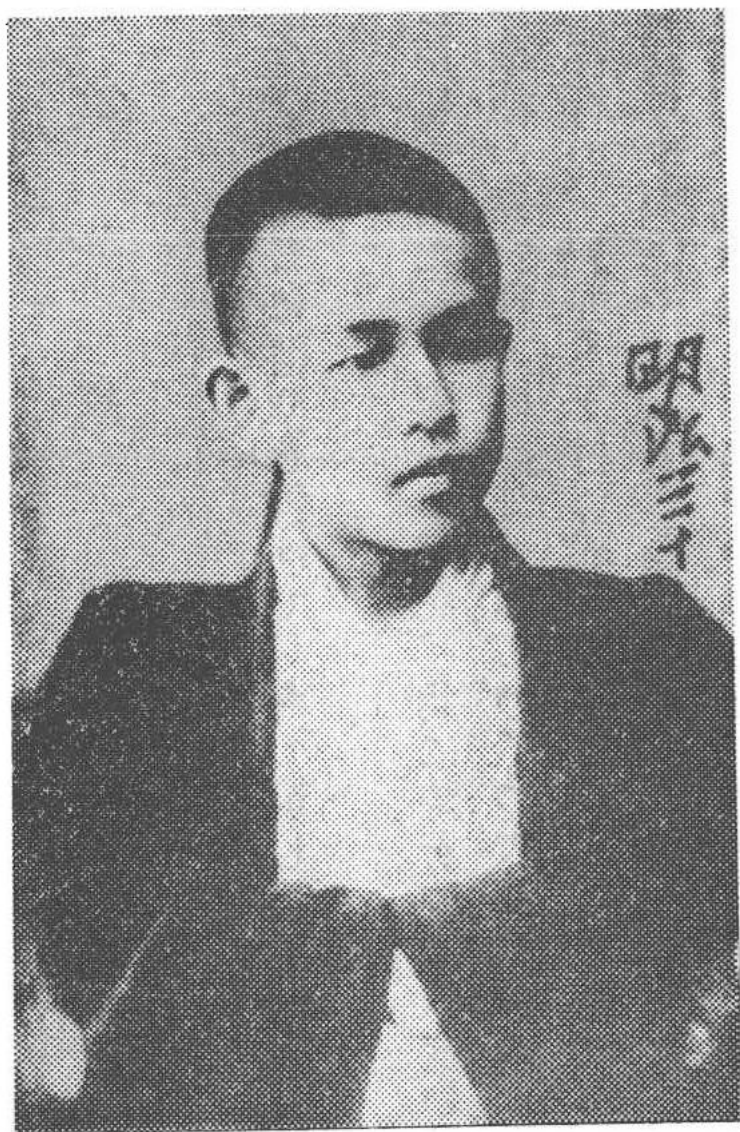
ローマ字日記〈全〉……………137

明治四十四年当用日記……………225

千九百十二年日記〈最後の日記〉……………259

日記として極限的なもの……………小田切秀雄……………283

啄木略年譜……………290



17歳の啄木（明治35年）

（明治三十九年三月四日
—三月三十一日—）

浚民日記

西曆一千九百〇六年
明治三十九年

○三月四日。

九ヶ月間の杜陵生活は昨日に終りを告げて、なつかしき故山浚民村に於ける我が新生涯はこの日から始まる。

浚民は、家並百戸にも満たぬ、極く不便な、共に詩を談ずる友の殆んど無い、自然の風致の優れた外には何一つ取柄の無い野人の巢で、みちのくの広野の中の一寒村である。我が一家の此度の転居は、企てた洋行の、旅券も下付に成らぬうちから、中止せねばならぬ運命に立至つた事や、田舎で徴兵検査を受けたい為や、又生活の苦闘の中に長く家族を忍ばしめる事の堪へられなかつた為や、閑地に隠れて存分筆をとりたかつた為や、種々の原因のある事であるが、新住地として何故に特にこの僻陋を撰んだか。それは一言にして尽きる。曰く、浚民は我が故郷——幾万方里のこの地球の上で最も自分と関係深い故郷であるからだ。「故郷」の一語に含む甘美比ひなき魔力が、今迄、長く、深く、強く、常に自分の心の磁石を司配して居たからだ。愛と詩と煩悶と自

負と涙と、及び故郷と、これは実に今迄の、又現在の、自分の内的生活の全部では無いか。或は人は、人間到处青山あり、心ある青年は故郷の天地にのみ恋着すべきでないと云ふかも知れぬが、さり乍ら、詩人たる自分の学ぶべき大学が、塵の都のいかめしい大建築であるとは思へない。故郷は、いはゞ、神が特別の恩寵を以て自分の為に建てられた自然の大殿堂である。忘れもせぬ一年の前、自分が東都の空にさまよふて居た頃、はからずも両親がこの洩民を見捨てねば成らぬ運命になつてからといふもの、自分は如何に幾度あたゝかい涙を以てこれを悲んだか。故郷は実に無限の魔力を以て我が全心をひき付けて居たのである。春は春、秋は秋、年々に変り無き四季のめぐりを迎ふるにつけ、事々に思ひ出しては物狂ほしきまで一家洩民の話に夜の更くるをも忘れたものであつた。……………

あゝ、この世のいとも安けき港！ その安けき港に今日から舟がゝりする身と成つたのだ。恰も一の姉が鹿角の里で永眠した七日目。在天の姉が魂も必ずやこれからの我が幸を守つてくれる事であらう。

父は野辺地が浜にあり。妹をば通つて居る学校の女教師の家に下宿さす事にして盛岡に残した。母とせつ子と三人、午前七時四十分盛岡発下り列車に投じて、好摩駅に下車。凍てついて横たひする雪路を一里。街の東側の、南端から十軒目、斎藤方の表坐敷が乃ち此の我が一家当分の住居なので。

不取敢机を据ゑたのは六畳間。畳も黒い、障子の紙も黒い、壁は土塗りのまゝで、云ふ迄もな

く幾十年の煤の色。例には洩れぬ農家の特色で、目に毒な程焚火の煙が漲つて居る。この一室は、我が書齋で、又三人の寢室、食堂、応接室、すべてを兼ねるのである。あゝ都人士は知るまい、かゝる不満足の中の満足の深い味を。

取片付けや何やかや、有耶無耶の中に日は暮れた。晚餐には知人数名、祝のしるしの盃も四合瓶一本の古酒で事足りた。

夜、これでとう／＼渉民へ来たのかと思ふと、何かしら変な感じがした。安心した様な、気がぬけた様な……。枕についてから、今朝好摩からの途中、巡礼の六部に逢つて、姉の死んだのを思ひ出し、銅片を喜捨して立ち乍ら祈禱して貰った時の心地を思ひ出して、何となく心穏やかに眠についた。

○三月五日。

朝寝が有名の自分も、これからは早起しやうと思ふ。今朝の起床が七時頃。これで一日三時間づゝ時間の経済がとれる割合。

起きると新聞が配達になる。東京のが読売新聞、毎日新聞、万朝報、それに岩手日報を加へて四種。格別の記事もないが、近頃の新耳目は、天下の名士河野広中氏らの兇徒嘯聚事件についての警視庁の卑劣なる行動の曝露された事である。昨年九月五日、ポーツマス条約の屈辱に義憤を

發して、國民大会が河野氏等の主唱の下に日比谷苑頭に催された。警視庁が無謀にもこれを暴力を以て禁止したのが、はからずも幾万愛國の赤子の怒を買つて、東京は忽ちに暴動の府となり、内務大臣官舎が焼かれ、幾多の警察署が破壊され、幾百の交番も焼打の的、あはれ聖代帝闕の下、叫喚の嵐潮の如く、義憤の猛火全都に漲つた。巡查が抜劍する、戒嚴令が布かれる、河野氏等を初め二百幾十名は直ちに兇徒嘯聚罪として檢挙されたのであつた。かくて今年その公判が開かれるに及んで、凶らざりき、國民の安寧を保護する筈の警視庁が、諸名士を罪に陥れむがために、幾百の黄白を散じ、無腸漢を買収して殊更に神聖なる法廷に偽証を申立てしめむとした事が天下に曝露されたのだ。最後の勝利は正しき者の手に落つるとは云ひ乍ら、警察権の不信今日の如くば、國民は何れの時に安んじて眠る事が出来やう。

目下政界争論の焦点は鐵道国有案である。國家經營上の利便と社會政策的見地からは可とせられ、事業の前途のためと國益増進の立脚点からは否とせらるゝ。読売は賛成し、万朝毎日是非國有に傾いて居る。自分の考へでは、どちらでもよいやうなものゝ、便利だから乗るには乗るが一體が瀟車は嫌ひだ。今迄の実見によると鐵道員に一人として面白い人相を持つた男が無い。若し此上彼等にお役人風でも吹かせられた日には、たまつたものでない。

加藤外相はこの鐵國案を以て國家經濟の前途を誤るものとし、内閣諸公と議合はずして、就任以來僅か一月なるに断然冠をかけて野に下つた。世評は、この決断によつて彼は猶政治的生命を保ちうるといふに一決して居る。惜しむらくは此決断は今少し早く、戰時稅繼續策の當時に於て

既に決せらるべき性質のものであつた。

最善最美なる政治とは、民族を代表する大人格的天才によつて行はるゝ政治である。若し不幸にして国民がかゝる天才を有せぬ場合には、不止得国民多数の意志を體現したる政党内閣を組織するより外に政治の美果を収むる道が無い。(尤も今日の如く腐敗したる党人の多い時代は、又別途の觀察を要するが。) 現首相西園寺氏は、兎に角に最も勢力ある政友会の総裁たる人である。この政党主領によつて組織された新内閣は、果して真の政党内閣といふ事が出来やうか。椅子の分配にさへ、民人の怨府となつた前内閣の首相と相談したとか。本年度の予算の如き殆んどその全部を踏襲して居る。言訳はどうにも出来やうが、これで内閣交迭の実が何所にある。戦時税継続案もさうだ、鉄道国有案もさうだ、利に傾く多数の党人を籠蓋して、前内閣と同じ狂暴を逞しうして居る。人は人材内閣といふ。しかも、同じ理想の下に統一を保つてこそ人材もその人材たる光を充分に發揮するもの、各々種々の關係から余儀なくされた結合が何で人材内閣の美名に背かず居られやう。交迭以来一ヶ月有余にして早く有力なる外相の掛冠を見るに至つたのも、恐らく這般の消息を伝ふるものではないか。

近時世界外交局面の花形役者は、矢張り独逸皇帝である。モロッコ問題活殺の鍵も今は明かに彼が掌中に握られて居る。近くは、南清に暴徒起り、北京の巡查も銃器を提げて変にそなへるといふ今、清国撤兵を主張するのも尋常の魂胆ではないらしい。あゝ矢張り一代の政治的天才ビスマークを生むだ国は流石に伊藤博文の故国よりは豪いところがある。

「毎日」には社会主義者木下尚江が第三の小説『新曙光』が載つて居る。「読売」の小栗風葉君作『青春』秋の巻は休載中。

午後女教師上野さめ子女史が来た。熱心なクリスト教信者である。自分は、我等が神人クリストに就いて思ふうちで、クリストも亦人間であつたと思ふ程力と慰めを与へる事はない、と語つた。又、黙禱によつて心を安めた実験や、この世の事々物々皆何事かの暗示象徴であると思ふ事なども語つた。それから、移転早々から小遣が無くて困るので三円だけ貸して貰つた。

晚餐を共にし、夜、せつ子と三人、それに村の児等を伴ふて川崎まで行つて来た。月光冷ねく、岩手の山神々しく、天地闊として音をひそめた寂静の裡、堅雪を踏んで、無邪気な追懷に辿りゆく心地は、とても筆にも語にも尽されない。

佐々木孤舟から手紙と『紫玉遺稿』とを送つて来た。遺稿には我が序文を載せてある。知人への通知を書く。曰く、天下の逸民啄木、今度はグツトおとなしく出て、再び故山民衆村の住人と相成申候。草々。

○三月六日。

尽日雪ふる。無事。牛オリンを弾く。

自分は今迄あまりに繁く刺激を受けた。これから静かに考へねばならぬ。そして書かねばならぬ。小説を書かねばならぬ。

客があつた。

○三月七日。

寒氣つよし。

『明星』三号来る。万里君訳トルストイの「楽人のおとろへ」を面白く読んだ。創作には、短歌の外注目すべきなし。蕭々君の長詩、我はとらず。

一昨日も昨日も今日も、高等科の児等が遊びに来た。恐らくこれから毎日来ることであらう。一体自分はよく小児らに親まれる性と見える。そして自分も小児らと遊ぶのが非常に楽しい。自分がオリンをひいて、小児らが歌ふ。無論極めて無邪気な小学唱歌だ。何か譚をしてきかせるとおとなしく真面目に聞いて行く。あゝ若し我にして多少なりとも善良なる感化を彼等に与へるべくば、彼等のために毎日二時間や三時間を費しても、些の惜む所はない。今の世に自然のまゝの飾気ない心情を持った者を尋ねれば、無学な農圃の野人と小児の外には無いのだ。

沼田丑太郎君を始め、村の人々、毎日来ては茶をのむで話をして行く。こゝ暫くのうち、まだ筆をとる程の時間もないらしい。

○三月八日。

故郷の空氣の清浄を保つには、日に増る外来の異分子共を撲滅するより外に策がない。清い泉の眞清水も泥汁に交つて汚水に成る。自然の平和と清浄と美風とは、文明の侵入者の為に刻々荒されて、滅されて行く。髯の生へた官人が来た、鐵道が布かれた、商店が出来た、そして無智と文明の中間にぶらつく所謂田舎三百なるものが生れた。あゝ、蘇国に鐵道の布かれた時、ライダルの詩人が反対の絶叫をあげた心も忍ばるゝ。文明の暴力はその發明したる利器を利用して駭々として自然を圧倒して行くのだ。かくて純朴なる村人は、便利といふ怠惰の母を売りつけて懷を肥す伶俐な人を見、煩鎖な法規の機械になり、良民の汗を絞つて安樂に威張つて暮らして行く官人を見、神から与へられた義務を尽さずにも生きる事の出来る幾多の例証を見た。かくて美しい心は死ぬ、清浄は腐れる、美風は荒される、遂に故郷は滅びる。賢明なる学者はこれを社会の進歩だ、世界が日一日文明の域に近づくのだと云ふ。何といふ立派な進歩であらう。いかめしい教會が到る処に立てられて宗教の眞の信仰が段々死んだではないか。法律が完成して罪惡が益々巧妙になつたではないか。外界の進歩は常に内心の退歩だ。世界の初め日には精神ばかり存在して居た、世界の終りの日には形骸ばかり残るであらう。文明は矢張り人の作るもので、神のあづかり知らぬ所であらう。抑々人が生れる、小児の時代から段々成人して一人前になる。成人すると

は、持つて生れた自然の心のまゝで大きい小児に成るといふだけの事だ。しかるに今の世に於て、人が一人前になるといふ事は、持つて生れた小児の心をスツカリ殺したとせるといふ事である。自然といふ永劫真美の存在から、刻々離れゝて遂に悖戾の境界に独立するといふ事である。山には太古のまゝの大木もあるが、人の国には薬にしたくも大きい小児は居なくなつた。あゝ、大きい小児を作る事！これが自分の天職だ。イヤ、詩人そのものゝ天職だ。詩人は実に人類の教育者である。

今日、小児らと共に寺の小僧が来た。無論他郷者である。自分は今迄これ位厭な卑俗な人相を見た事がない。年は十八だとか。その又音声の厭な事。これも悪むべき侵入者の一人である。よしや彼が一の悪事をも成さなんだにしても、純朴な郷人の心には、彼のこの卑俗な人相を一見しただけでも恐るべき悪感化が刻まれるのだ。自分は何とかして、世の中の斯ういふ人相の悪い者共を一括して何処かに推し込める工夫はあるまいかと思つた。そしてこの村の寺といへば、自分が十幾年の間育つた所ではないか。その寺が今こんな奴の蹂躪に委せられてあるのかと思ふと、実に何とも云はれぬ厭な心持がした。

~~~~~  
芸術の人は汎く一般人類の教育者である。然し乍ら、詩乃至一汎芸術が教育の奴隷ではない。寧ろ教育なるものは、芸術のうちの一言蓄に過ぎぬ。人間教化の要求が、芸術の内容と分離して、実際的になり直接的になつて初めて普通の所謂實際的教育なるものが起つた。



芸術の内容、乃ち生命、と分離したものであるから、教育それ自身は本来空虚である、死物である、残骸である。たゞ、芸術の内容の代りに、教ふる人の人格と結びついて、初めて充実し、生命を得、効果ある真の教育と成る。

芸術は人間最高の声である。直ちに宇宙の内在に肉薄した刹那の声である。されば、教育が本来人間と密接であるに反して、芸術はむしろ神に近い。さればその教化的勢力は、較て間接的である。一旦美の淨苑に人の心を誘ひ出して、それから神秘の窓をひらいて宇宙の大道を示すのだ。例へて見れば、實際的教育は直接に人の家におとづれて物を与へる様なもので、芸術は先づ自分の家に人を招いで饗応して、それから歸る時にお土産を与へてやる様なもの。

教育は芸術の司配者ではなく、寧ろ芸術の中の一含蓄である。古来の大芸術品には、作者の意識と無意識に論なく、必ず何らかの深大久遠なる教訓が含まれて居る。之に反して、教育も、その結合したる人格によつて神に近づくに従ひ、何らかの芸術的形式を備へる様になる。千古の大教育者クリストの一生は渾然たる大詩篇を成して居るではないか。教育と芸術との関係は斯くの如くであるから、若し芸術を教育の目的に用ゐ、未だ完たく美の溶炉の中に陶溶せられざる思想を芸術に表はさむとする事があるなら、それは恐るべき芸術の敵である、墮落である。

尚一言すべき事がある。善悪は相對的評価で、真と美とは絶對的存在であることだ。そして實際的教育の教ふる所は善であるが、芸術の教ふる所は、善——道德以上に、真と美とである。